

<四万十カヌーとキャンプの里 かわらっこ>

Hさん： 「かわらっこ」はカヌーとキャンプの施設なんですけど、県などいろいろなところから補助をもらって他にも事業を始めています。

「かわらっこ」というのは施設名で、大川筋地域振興組合として、上流から9つの地区が集まって、運営しています。

平成12年に、市からの委託事業として利用料金制で「かわらっこ」を運営して、2年くらいかけて、市の補助無しで経営をするかたちに変えました。さらに、平成18年に指定管理となっています。

今のところ、正組合員約220人で正社員が2名、ふるさと雇用で2名います。7～9月の多客期にあわせて、4月から6ヶ月雇用として数名雇っています。

修学旅行の受け入れの場合は、カヌー業者などに協力してもらって、スタッフを借りたり船を借りたりしながら、協力してやっています。

主な業務内容としては、まずカヌーです。多い時には、1ツアーで80人以上のツアーになったりします。次に、キャンプ場です。夏場はほぼ満杯になります。

あと、地域の人と密着してやっていくということで、直販所もして、組合員の生産製造している特産品や野菜等を販売しています。

農家民宿のあつ旋もやっていますが、農家民泊は受け入れ(人数)が少ないので、修学旅行とかになると、キャパの問題がでてきます。文科省の方針で、修学旅行は体験型の修学旅行になってきていますが、東京とかに営業に行った時にキャパの問題を指摘されました。

あとは、やはり交通の面です。関西や関東方面からの修学旅行になると300人とかの単位になり、空港のキャパが問題になっています。移動時間も問題です。そこを除けば、幡多エリアは、海と山と川が三拍子揃って、他には全国どこにもなく、そこは大々的に売っていけるところなので、行政の方が力を入れていただければいいと思います。

他には、川漁体験や支流遊びなどの体験メニューを今、考えて増やしていているところです。体験メニューづくりは、今からのグリーンツーリズムに大変必要になってくると思います。この前、県の補助をもらって、徳島であったグリーンツーリズムの育成会に参加することができました。その時に思ったのは、やはり個人でそういう講習会にはなかなか行けないということです。値段もかなり高く、補助や行政の力がないと行けない部分も出てきます。大変意義のあるもので、時間も朝8時から夜中の1時半くらいまでの講習を受けてきました。徳島の勝浦町のおばちゃんたちも参加されていましたが、そこは年配の方50名くらいが体験のインストラクターをやっていて、地区でものすごく頑張っているところです。そこで感じたのが、今から民宿や体験メニューを増やしていくのであれば、やは

り地元のそういう年代の意識レベルの改革が大事だと思っています。

九州のほうでも、成功しているところがあると聞きました。そういう面に力を入れてもらえるとうごくいいかなという気はしています。

他に、四万十川の流域の観光資源を連携させて、回遊滞在型観光ができる仕組みを構築するために、平成19年に「四万十また旅プロジェクト」という経済産業省の補助事業で始まったプロジェクトをしています。四万十川流域は、回遊の滞在型の観光じゃないと、やはり移動とかにかかっているところまわれなくなるし、通過されるだけになってしまうので、滞在型観光がすごく大事です。

今はネットワークといえばインターネットなどでやっていますけど、この連絡会に関しては、それをしつつ人と人で情報をまわしていくというのが大事だと思っています。良い景色を観ても、一度行けば次はなかなか行かないと思いますが、もう1回戻って来るとすれば、「人」だと思います。リピーターが多いというのは、多分人柄にひかれて、ああ、また会いたいなというような感じで帰って来るとだと思います。

うちも、キャンプに関しては年間約3000人、カヌーは5000人、修学旅行が約1000人となっていますが、夏場はほとんどリピーターの方で、毎年子どもが成長していくのが見られます。

また、中山間直接支払い制度による事業もやっていますが、去年の9月に集落協定の認可を受けました。地域の人との協力を得ながら草を刈ったり野焼きをしたり、あと、トラクターで耕すようになっていきます。これは、耕作放棄地の問題を解消するため、地域活性化のため、あとは一次産業とつなげるために、耕作放棄地をなくして、農産物を作り、物販のほうでも何かできないかということでやり始めています。それに少し連動しているのが、四万十川流域に昔からある特産物で仏手柑（ぶしゅかん）がありますが、「ぶしゅかんプロジェクト」といって、農工商連携で、一次産業と観光を結びつけていこうと、去年から研究してきました。今年から実際商品開発をして売り出していこうというところまでできています。

次に、四万十市からモデルハウスの委託管理を依頼されて、県内産の木材とか使った県内の建築家による家作りを提供することを始めました。一応、（モデルハウスに）宿泊はできる体制になっています。7年間はこれをやっていこうということで、1年間少し様子をみながら、市の補助も受けながら、モデルハウスとして、県内産の四万十のヒノキとか、四万十市に在住している建築家の人たちをもうちよっと売り出して、職を提供したいということで始めています。

知事： 本当に総合商社みたいですね。

ご存知かと思いますが、県も一定以上の比率で県産材を使ってもらったら最大

100万円まで補助が出ますという制度をやっていますので、是非それを使っただきたいと思います。

さっきリピーターというのは最終的に人だと思っておっしゃいましたが、本当にそうなんですよね。素晴らしい景色は1回観たら、観たことあるで終わるといいますもんね。キャンプはほとんどリピーターの方ですごいですね。

講習会の件ですが、こういう人材育成事業というのは、だんだん拡充をしていきたいと思っています。例えば、我々も体験型観光の日本のカリスマみたいな人を呼んで、アドバイスをしてもらおう事業といったこともやったりもしています。

いずれにせよ、皆さんが勉強される場をいろいろ構えていくような、そういうメニューを揃えていく取り組みは本当に力を入れなければと、思っています。

それとキャパについては、受け入れる側（宿泊）のキャパの問題もあるでしょうが、そこは分宿の手もあるのかもしれないので、いわゆる航空機の機材が小さい、シートが確保できないという話ですよ。

Hさん：　そうですね。いっぺんに移動ができないと困るとか、分散するとかいう話もあるんですけど、今、保護者の方が、同じ場所じゃないとだめということが多いです。うちのカヌーでも同じところからやってくださいと言われるんですよ。

うちは、基本的に上流から下流に「かわらっこ」まで下ってきて、午後のコースは、「かわらっこ」から下流に行くんです。そうしないと、船の運搬ができないので、できれば午前・午後、大体80人・80人とかいうかたちで修学旅行とかはやっていますが、場所も同じじゃないといけないという学校も、少ないですがあります。

知事：　飛行機の件は、だんだん航空会社も協力して下さるようになって、トリプルセブンといった大きい機種が来始めたりもしてるんですけど、まだまだ、路線によって課題がありますからね。修学旅行特有の、特に滞在型に対する対応というのはもう一段考えないといけないところはあるでしょうね。